

神永正博著『未来思考 10年先を読む「統計力」』朝日新聞出版 2010年

著者の前作『不透明な時代を見抜く「統計思考力」』（2009年）は、統計を通して社会問題、経済問題を読み解く、数学が苦手な人のために書かれた数式を使わない統計学の解説書である。基礎編「データをみる」、中級編「データを読む」、上級編「データを利用する」という三部構成で、副題となった「小泉改革は格差を拡大したのか」という命題を中心に、それぞれのレベルから検証を加えていくものとなっている。この前作を教科書とすれば、本書はその「統計思考力」をもって各種データから日本の現状と将来を検討する、統計学の実用書といえる。

分析の中心となるのは比較的信頼性が高いとされる人口推計で、これに経済学や社会学的な補足を加えながら、“少子化と結婚”、“都市と高齢化”、“仕事と経済”という3つの大きな課題について、統計的な検討が展開される。

最初に検討される“少子化と結婚”は、「第1章 日本の少子化、世界の少子化」、「第2章 結婚しません?」、「第3章 産む自由、生まれる義務」から構成される。そのなかで、少子化や結婚については、社会情勢の影響が大きいことを過去のルーマニアの人口増大政策やベルリンの壁崩壊時の東西ドイツの出生率の変化などから指摘し、さらに、年収と結婚の関係や出産に関わる医療関連の各種データなどから、その現状と将来を読み解いている。

2つ目の“都市と高齢化”は、「第4章 人はどのように動いているか」、「第5章 都会は強力な磁場である」、「第6章 都市壊滅!?’の3つの章からなり、人口推計や国勢調査などをもとにして、都会（とくに東京）への人口集中とそれによる地方の高齢化の促進が指摘され、さらに近い将来東京で大地震が起きる確率が専門的なデータから検討される。

3つ目の“仕事と経済”では、様々なデータを使いながら、「第7章 仕事というぜいたく」で非正規雇用の問題をとりあげ、「第8章 もし世界がひとつの村だったら」では貧困と格差を検討し、「第9章 日本は変わるのか」で今後の労働市場やビジネスモデルが展望される。

全体を通して、想像もつかないような突飛な予測が出るわけではなく、多様な領域のデータを積み上げ、過去の社会情勢なども確認するなどして、地道に精度を上げながら予測を構築するスタイルとなっていることが本書の特徴といえる。一つの命題に対して、多くのデータを集積し、多面的な検討を加えていくこのスタイルは、数字を統計的に考える上で非常に参考になるものである。また、現代的な課題・問題をとりあげたことで、読み物としても面白いものに仕上がっている。

なお、著者は最後に「この問題は本当に問題なのか?」と立ち止まって疑うことが必要だと問いかけている。本当の問題をしっかりと見極めた上で、その解決策を見つけるために、一読して「統計思考力」を高めてみてはいかがだろうか。

（加藤健志）